

以上各篇、何れもそれ／＼に新しい見地に立つた論旨を鋭い筆致を以て、吾人に推古美術の再認識を要請し、既得の智識を是正せん事を要求する底のものである。従つてその何れに就いても要旨を紹介すべきものであらうけれども、特に吾人の間に深く感銘を與へた野間氏の「止利佛師に關する考察」を摘記して、紹介の責を果す事にしたい。

野間氏は、止利佛師に關する一つの試論であるとの前提を以て次の様な事を論ぜられた。

第一に、止利佛師の家を、「鞍作」と呼んだのは、恐らく彼の家が、元來からの佛師として我國に止住したのではなくして、やはり其の姓の通りに「鞍作」であつたのではないか。彼の馬の背と人の股との間に生ずべき複雑極りない多種多様の曲線を作り出す技能は、よく佛像の反轉極りなき衣紋を作り得たのであらう。而して彼等が佛師として我國に流來した人々でなかつた事のために大陸にて完成の極地に達した北魏式の佛像を、日本に於ては、新來のものとして新しい方向への完成を達したのである。止利が既成佛工でなかつたから、造藝工としての作家感から造佛を取扱つた爲に、完成體の更に完成が遂行されたのである。——といふのであつて、論旨を進める技術の上に少しく無理があるやにも思はれるけれども、問題の狙ひ所は、賛意を表し得るものと思ふ。

〔日本綴半紙版一五〇頁。法隆寺村鶴故郷舎發行、定價二〇〇〕(中村)

## ○日本憲法制定史講

渡邊幾治郎著

本書の著者渡邊幾次郎氏は、既に退官されて居るが、帝室編修官の職にあり、其の論著は既に數多く雜誌新聞紙上に發表されて居り、其の學的經歷に就いては今改めて云ふを要しないであらう。序言に依れば、從來新聞雜誌紙上に發表した多くの論著の中より明治史關係の論文を中心として、是に改訂を加へて編纂したもので、其の論文は憲政史に關するものが多いから「日本憲法制定史講」の名を付した。尙著者は、憲政史其の他の諸問題に對しては、是を明治史の一部として觀察し、國史の歸結とし、發展として觀ると、其の立場を明にし且つ、老來、時事に對して杞憂なき能はず、時に感憤激の餘り、過去の歴史人物に對し、或種の批判を下し、或は譏刺褻侮を寄せや、もすれば、所謂、史家の領域を踏み越えたことがあるかも知れない。乍然現在の多くの史家は餘りに客觀的と云ふ事に囚はれ過ぎてゐる爲、歴史が徒に過去の物となり、現在と没交渉になつたのではなからうかと云つて居る。果して著者の此の立場並に研究方法に就いては尙論議の餘地はあるであらうが、明治初年の我國の重大事たる憲法史に關する物を數多く所載せる本書が、國體明徴の叫ばるゝ現代に於て、刊行せられた事は、眞に意義ある事であり、本書によつて我國憲法制定當時の事情並に當時の國體思想を伺ふ上に於て好個の論著と云ふを得るであらう。

左に所收論著の題目を掲げて置く。

- 帝國憲法の制定……………(一頁―七六頁)
- 憲法制定前後……………(七七頁―一〇三頁)
- 五箇條の御誓文と宸翰……………(一〇四頁―一二五頁)
- 伊藤博文の憲法思想……………(一二六頁―一四五頁)
- 伊藤博文の憲政及び政黨思想……………(一四六頁―一六〇頁)
- 伊藤博文と元田永孚の思想的軋轢……………(一六一頁―一八四頁)
- 立憲的内閣制度の創始に就いて……………(一八五頁―二〇七頁)
- 帝國憲政の三大思想……………(二〇八頁―二二五頁)
- 福澤諭吉の立憲思想……………(二二六頁―二六〇頁)
- 維新以後に於ける皇室及び國體思想の變遷……………(二六一頁―三〇二頁)
- 新日本の建設者……………(三〇三頁―三三九頁)
- 陸奥宗光とその憲政思想……………(三四〇頁―三七一頁)
- 教育勅語の頒發を盟誓せる人々……………(三七二頁―四〇二頁)
- 明治維新の明暗二方面……………(四〇三頁―四二三頁)

以上

○神戸市史(第二輯)

神戸市役所編

叢に刊行せられたる神戸市史は故内田銀藏博士の立てられたる編輯原案を根柢として、故原勝郎博士を編纂監修、新村出博士を同

顧問とし、其の下に主として古田良一氏、岡久發三郎氏等が編纂員としてその業に當られたものであるが、其外故三浦周行博士、喜田貞吉博士等も執筆せられ、かくの如き斯界の權威を網羅せる前輯市史は夙に廣くより此種編纂事業の白眉として認められてゐた。

此の前輯市史によつて神戸市に於ける古代より最近世に至る歴史的變遷を眞によく理解し得るのであるが、此等の記載事項が原則として大正七年三月を限りとして筆を擱いてゐるため、近時に於ける複雑多岐なる社會情勢の變遷に伴ふ其後の神戸市勢の變動は大正七年以前に比して正しく隔世の感を抱かしむるものあり、其等變遷の情況を窺知し得ざる憾が存したのであるが今爰にその續編とも稱すべき第二輯神戸市史が編纂上粹され詳しく其等の事々をも知るを得るに至つた事は慶しい次第である。

此第二輯市史は前輯市史編纂顧問たりし新村出博士が同じく其顧問として編輯を統率せられ、また前史編纂員岡久發三郎氏その編纂を主任しその下に主として日置彌三郎氏等が其の業に當り昭和九年四月より編纂に着手し同十二年六月完了せられたものである。その編纂方針は大體に於て前輯市史に準據して居り、大正八年より昭和八年に至る十五ヶ年間の諸事歴を記載してゐる。

第二輯市史は三冊より成り第一冊本編、第二冊別録、及び第三冊附圖、資料、年表、索引等の各項に分れてゐる。第一冊本編は總説各説にわけ、總説にては世界大戰進行中に於ける異常なる市勢の伸展、大戰の終熄及其後の反動來による財界の困憊等の情勢